

「木場の窓から見えるもの(元外交官の視点)」

当社顧問石井正文氏(前駐インドネシア日本国大使)による
気になる海外情報を原則第2、第4木曜日に配信しています。

第49回:「「予定」以上に成功」したG7広島サミット

2023年5月25日配信

【ポイント】

■5月19日～21日に開催されたG7広島サミットは「「予定」以上に成功」!

- ①ウクライナ問題での結束+前進+存在感=ゼレンスキー訪日+ロシアの更なる孤立
- ②一方、中国には言うべきことを言いつつも対話と共存の窓をオープンに
- ③核軍縮に対する事前の期待値調整に成功+一定の「形」を確保
- ④アウトリーチ国8か国の選択は戦略的に正解
- ⑤その他の具体的進展

【本文】

■要素その1. ウクライナ問題での結束+前進+存在感=ロシアの更なる孤立

- ・ゼレンスキー大統領の対面参加が決定的効果
 - *ゼレンスキー大統領にとっては、各種バイ会談、追加支援引き出し等のプラス大
 - *日本側としても、初のアジア訪問国になり、インド等を含むお座敷を提供したプラス大
- ・ロシアに対し独自の立場を取る国からも、協力に向けた一定の言質を取り付け
 - *ゼレンスキー大統領とモディ・インド首相は紛争後初会談。モディ首相は、ウクライナ戦争解決のために、インドは、そして個人的にも、あらゆることをやる、旨発言
- ・中国にも役割を果たすよう要請
 - *「ロシアが軍事的侵略を停止し、即時に、完全に、かつ無条件に軍隊をウクライナから撤退させるよう圧力をかける」よう要請
- ・支援・制裁の具体的進展あり
 - *欧州諸国の対ウクライナF16提供に対して米国は反対しない旨を、広島で表明
 - *対ロシア輸出規制の拡大;米国が求める全輸出規制までは踏み込まない一方、「ロシアの侵略に重要な全ての品目」の輸出制限確保に向けた行動拡大を表明。

■要素その2. 一方、中国には言うべきことは言いつつも対話と共存の窓をオープンに

- ・「G7広島首脳コミュニケ」では、前文から「デカップリングではなく、多様化、パートナーシップの深化及びデリスキングに基づく経済的強靱性及び経済安全保障」での協調に言及
- ・(単独声明では無く)首脳コミュニケの地域情勢部分の51、52パラで中国に言及

【ポジ的言及】

- * 中国に率直に関与し懸念を直接表明することの重要性を認識しつつ、「建設的かつ安定的な関係を構築する用意」を表明
- * 気候変動等の「グローバル課題と共通関心分野で中国と協力する必要」を表明
- * G7の政策方針は「中国を害することを目的としておらず、中国の経済的進歩及び発展を妨げようともしていない」ことを明言。
- * 「中国が、国際的なルールに従って振る舞うことは世界の関心事項」と言及

【ネガ的言及】

- * (パラ28(経済的強靱性・経済安全保障)で)「経済的威圧に対する調整プラットフォーム」を立上げ、連携を強化。重要なサプライチェーンにおける過度な依存を低減
- * 「公平な競争条件」を求め、「非市場的政策と慣行がもたらす課題に対処」し、「不当な技術移転やデータ開示などの悪意のある慣行に対抗」
- * 国家安全保障を脅かすために使用され得る先端技術を、貿易及び投資を不当に制限することなく保護する必要性を認識
- * 東シナ海及び南シナ海の状況を深刻に懸念。力又は威圧によるいかなる一方的な現状変更の試みにも強く反対
- * 国際社会の安全と繁栄に不可欠な台湾海峡の平和と安定の重要性を再確認。兩岸問題の平和的解決を促す。

■要素その3. 核軍縮に対する事前の期待値調整に成功+一定の「形」を確保

- ・「広島」サミットである以上、核「軍縮」の具体的動きが期待されたが今回は無理
 - * ロシアの核使用恫喝+中国の核軍備の急速拡充+核抑止強化を求める米国の同盟国(=韓国)
 - ⇒80年代後半以降の軍縮=核弾頭数減少が増加に転じる瀬戸際
 - * 米国内でも①核の傘の信頼性維持のために核軍拡に舵を切るか、②引き続きロシアと軍縮を進めその後中国に対応するか、で議論が二分されている状況
- ・その中で、幾つかの具体的「形」を実現し、批判はあるものの、それなりの評価を確保
 - * 「広島3点セット」(記念碑献花、資料館視察、被爆者との接点)をG7首脳の最初の行事として実現+招待国、国際機関首脳とも実施

- * バイデン大統領の署名;「核兵器を永久になくせる日に向け共に歩んでいこう」
- * 核軍縮関連のG7初の単独文書(「核軍縮に関するG7首脳広島ビジョン」)発表。
(ロシアも念頭に)核兵器を二度と使ってはならないこと、核廃絶が究極目標であること等を、G7の合意として表明

■要素その4. アウトリーチ国8か国の選択は戦略的に正解

- ・「議長国」⇒インド(G20)、コモロ(アフリカ連合(AU))、インドネシア(ASEAN)、クック諸島(太平洋諸島フォーラム(PIF))
 - * ASEAN、PIFは日本主催ならではのアジア重視
 - * インド、インドネシアの重要国を議長国として呼べたのは幸運
- ・「それ以外」⇒ 豪州、韓国、ベトナム、ブラジル
 - * 豪州;クアッドの一員。バイデン訪豪中止にも拘らず広島でクアッド首脳会合実現
 - * 韓国;日韓関係改善の流れに沿った韓国重視のジェスチャー。韓国人原爆被害者慰霊碑共同参拝は象徴的に重要
 - * ベトナム;民主主義国以外でも「法の支配に基づく国際秩序」を支持する国とは協力できることの象徴+東南アジアで最重要な同志国の一つ
 - * ブラジル;BRICSからインドに次ぐ「切り崩し」+ルラ大統領重視のメッセージ
反米・反G7で若干のリスクはあったが、親日のルラ大統領は抑制的行動

■要素その5. その他の具体的進展

- ・日本が一貫して強調した「2つの視点」の浸透
 - * 「法の支配に基づく国際秩序」の堅持;「民主主義」に限らない。ベトナムも重要
 - * いわゆる「グローバルサウス」への関与の強化
 - 9つのセッションの内、初めて3つを招待国セッションに(従来は2つ)
 - 同時に、十把一絡げにしない「きめ細かな対応」の必要性を強調
- ・初めて経済的強靱性・経済安全保障の単独セッションを設定し重要性を強調
 - * 首脳コミュニケ+単独「経済的強靱性及び経済安全保障に関するG7首脳声明」発表
 - * 「経済的威圧に対する調整プラットフォーム」立上げ(前出)
- ・北朝鮮に対し、「拉致問題を即時に解決するよう求める」と首脳コミュニケで表明
- ・その他;信頼できるAIの実現に向けた国際的ルール作りを主導、福島第一原発の処理類海洋放出に関するIAEAの検証をG7として支持
- ・マルチ・バイ諸会談開催
 - * G7諸国6カ国+全招待国8か国+ウクライナ=15のバイ首脳会談+国連事務総長
 - * クアッド首脳会合、日米韓の短時間意見交換

(以上)

りそな総合研究所 顧問 石井正文